

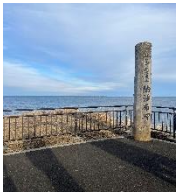
～“受け継ぐ”で終わらせない～

鵬翔高校 中尾 真利愛

学校では教えてもらえなかったこと

- ・根室の納沙布岬～歯舞群島の貝殻島まで3.7キロしかない
- ・境界線の1.85キロを超えると拿捕 or 銃撃される
- ・昆布漁をするためにロシアにお金を払って漁をしている
- ・ロシア人が今も島で暮らしている
- ・ビザなし交流というものが行われている
- ・島ではごみの自然発火が起きている
- ・樺太へ日本人全員が強制送還をされる
- ・昔は、日本人も四島に住んでいたこと
- ・ロシア人と日本人が共存していた時代があった
- ・安部とプーチンによる25回もの首脳会談があった

など

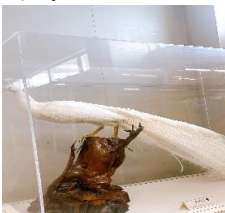


元島民の得能さんのお話や高校生の出前講座を聞かないと一生これまでもこれから知らなかったというような以前の四島のお話や現地に行かないと実感できない北方領土の現状というものがあった。

この問題は教科書1ページ、授業時間一時間で済ませず、県の活動ではなく、学校単位で授業とは別のものとして活動する必要があると感じた。

あふれる自然

○白孔雀



オオカミはもともと白であつたらしく島以外の場所は天敵が多いため狙われないように黒色に変化したらしい。そのため、孔雀も同じ原理で島には天敵がいなため白色の孔雀が見受けられ、ほかの場所では私たちがよく知る色鮮やかなものが見られるのだろう。

○らっこ



ここ周辺で見られる生物はフクロウなどとてもビッグサイズだが、特にラッコは下のアザラシを見てわかるようにとても大きい。

ロシアとの歩み寄り

私は研修二日目の高校生出前講座で先生が放った「ロシア人は悪くない」という一言が心に残った。以前までは個人的にロシア人は冷たく、怖いという印象があつたが、あくまでもロシアのトップの連中によってそのような誤解が招かれており、ロシア人一人一人は決して悪くなく、そのような発言には気を付けたほうがいいということ学んだ。

また、元島民の得能さんは、ビザなし交流に行かれた際のお話でロシア人は皆笑顔で抱きしめてくれると楽しそうに語られていた。今もなお得能さんの先祖のお墓をロシア人がきれいに清掃し守っているようだ。得能さんはロシア人と一緒に共存したいと言いつつ、まだ島にいたころロシア人と共存していたことやターニャに恋をしていたのも含め、口からは「僕たちと同じような思いをしてほしくない。」と言っていた。ロシアにとっても故郷となつてしまった今、ロシアから四島を返還してもらうのは僕たちから四島を奪ったように彼らから奪うことと同じになってしまう。先祖のお墓に手をそなえただけだ。そういわれたときに、四島返還をしてもらうことがなぜこんなにも複雑になっているのか初めて気づいた。

日本にしか目を向けておらず、一方的に考えていたが、ロシアにも都合があるのだと気づかされた。



○道中で出会った動物



～感想～

今回の研修において学習面も経験においても「初めて」がとても多くあふれていた。

北海道へ行くこと、雪を触る、見ることに、知らない子たちと一緒に時間を過ごすこと、四島をこの目で見ることに。

最終は、なぜか初めて行った地なのに「帰りたい」という気持ちになっていた。

この研修を通し、北方領土問題について以下のように考えた。

四島が日本だけでなく、ロシアの故郷にもなつてしまった今、四島を完全に返還してもらうのではなく、北方領土を拠点として、日本とロシアの平和を象徴する両国共存の地にするという選択肢もあるのではないかと。

あと私たちに残されたものは今回の研修を通して個人個人が見たもの、感じたものなどを多くの人に発信していくことである。

情報発信者の若者の一人である自分が、この考えを述べるのできるチャンスの場を逃さずにつかみ取らないといけず、語り継ぐだけではなく、早期解決をしないといけないということを念頭に置きこれからもこの北方領土問題に向き合っていくと思う。

